

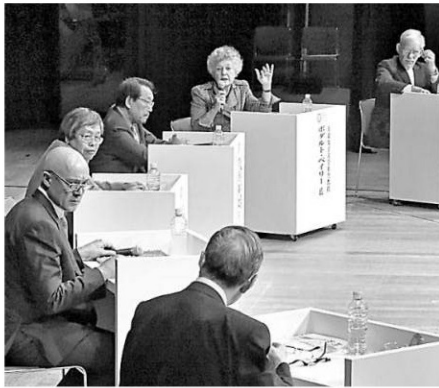
江戸期の平和検証

静岡 有識者ら国際シンポジウム

家康公

顕彰400年

世界史上で類を見ない約260年間の平和を実現した江戸時代について考える国際シンポジウム「徳川の平和とその智恵と遺産」(徳川家康公四百年記念事業静岡部会事業実施本部主催、徳川みらい)



約260年間続いた江戸期の平和について多角的に検証した国際シンポジウム=25日午後、静岡市葵区の市民文化会館

い(学会共催)が25日、静岡市葵区の市民文化会館で開かれ、国内外の有識者がさまざまな角度から幕政について検証した。「家康公四百年祭」の一環で、市民ら約150人が訪れた。芳賀徹貞立美術館館長を司会に、ロナルド・トビ米国人リノイ大名誉教授、ボタルト・ベイリ

登壇した。家康が将軍に就任した当時について、トビ氏は「日本は東アジアで孤立した状況にあり、家康は関係改善に腐心した」と説明した。スクリーチ氏は東アジア情勢ばかりでなく、江戸初期の幕政が欧州の宗教対立にもらみな

がら、同時並行的にバテレン禁止などの措置を取ったとの見解を示した。ベイリー氏は、江戸中期に来日したオランダ商館付ドイツ人医師の滞在記が同国の哲学者カントの平和論に影響を与えたとした。上垣外氏は「朝鮮王朝との国交回復に努め

た家康の背景に、儒教の『誠信』という言葉があったと指摘した。箕谷氏は「日本が明治以降も独立を保てたのは、江戸期に西洋文明を受け入れる思想的な素地ができていたため」と述べた。